©日本カムリ学会 2005
Bwletin Cymdeithas Astudiaethau Cymreig Siapan 1-1:3-8

設立記念講演　Darlithiau Agoriadol 1）
カムライグ語の属格構造 [1)]

小池剛史

Y gystrawen enidol yn Gymraeg

gan Takeshi Koike

要旨 Crynodeb

Tri math o gystrawen sydd yn dynodi perthynas enidol yn Gymraeg: h.y. (1) ffurfdro (dim ond gyda rhagenwau personol) (2) trefniad geiriau, a (3) cystrawen gydag arddodiad. Gosodir enw genidol ar ôl pen yr ymadrodd (*mab y dyn*). Y mae enw penodol mewn genidol yn pennu ei ben, felly ni chaiff osod bannod cyn y pen (**y mab y dyn*), ac y mae'r holl cymal enw yn benodol. Ond pan y mae enw genidol yn rhan o gymysg (*cadair freichiau*) ac yn gweithio fel ansoddair yn hytrach nag enw, nid yw'r gair genidol yn pennu ei ben, a chaiff y fannod ymddangos cyn y pen (*y gadair freichiau*). Defnyddir y cystrawen gydag arddodiad pan y mae angen i'r holl cymal enw yn aros yn amhenodol gydag enw genidol penodol (genidol cyfrannol: *un o'r dynion*; traethiad enw: *Y mae yn fab i'r dyn*).

1．属格構造の定義

まず最初に「属格構造」の定義を与える。属格構造は、一般的には所有を表すと言われるが、表され得る意味関係は、無制限と言って過言ではないほど多種多様である。しかしこの意味関係の多様性は、属格構造自体に由来するのではなく、属格構造に用いられる二つ名詞の意味に由来するものである。そこで属格構造に用いられ得る二つの名詞の意味を捨象した、属格構造自体の定義を考えなければならない。

この問題に対し、本稿では認知論的立場を取る。まず、名詞によって表され得る概念を総称して、生物/無生物、具象的/抽象的を問わず、モノ [2)]と呼ぶ。一つの名詞自体が指し得るモノの可能性は無数である。そこで話し手は、その名詞がどのモノを指すか、或いはどんなモノを指すのか、的を限定しなくてはならない。その手段の一つとして、的であるモノに何らかの形で関わりのある他のモノに言及することにより、それを道しるべとして、的のモノを特定するという方法がある [3)]。例えば、llyfr「本」という名詞について、どの llyfr なのかを聞き手に明確にするために、Dafydd という別のモノに言及し、llyfr Dafydd、つまり「ダヴィーズ」に何らかの関係のある「本」、言いかえれば「ダヴィーズの(所有の)本」と言うことになる。

©日本カムリ学会 2005
Bwletin Cymdeithas Astudiaethau Cymreig Siapan 1-1:3-8

道しるべとなる名詞は、あくまで道しるべであり、それ自体は注意の焦点ではない。そこで二つの名詞間には主・従の関係が生じる。従属する名詞は、主の名詞に従属していることを何らかの形で標示しなければならない。この従属関係を表す言語形式を「属格構造」と呼ぶ。属格構造を含む名詞句の中で、従の名詞を「属格名詞」、主の名詞を「主要語」と呼ぶ。

llyfr　　Dafydd
「本」　　「ダヴィーズ（の）」
主要語　　属格名詞

あるモノに言及し、それを道しるべとして他のモノを限定するという作業は、極めて日常的に行われる認知作業であり、それを表すための安定した文法形式が必要である。従って言語には、何らかの形で、文法形式の一つとして属格構造がある。印欧祖語では全ての名詞が格によって屈折変化し、格変化系列の一つとして属格形があった。安定した屈折変化体系があったからこそ、属格変化語尾による属格構造も、文法形式として安定していたのである。その後、多くの印欧諸語で名詞は格変化語尾を失い、語順、前置詞構造等の別の手段で名詞間の従属関係を表さざるを得なくなった。印欧祖語では、格変化語尾が名詞の従属関係を表したために語順は比較的自由であったが、言語によって、属格名詞が主要語の前（または後ろ）に来ることが多い、といったような傾向はあった。しかしこれはあくまで傾向であって、文法の一部として固定、安定したものであったかどうかは分からない。格変化語尾が衰退し、語順だけが従属関係を表示する構造となると、語順は固定化・安定化し、単なる「傾向」から文法形式の一つへと変化する（「文法化する」grammaticalise）。前置詞は印欧祖語でも用いられていたが、前置詞は、(Dafydd) o (Abertawe)「(アベルタウェ)から来た（ダヴィーズ）」といったように名詞間の従属関係の種類（この例では「出身」）を特定し、それを明確に表す場合に用いられていた。それに対し、属格語尾は従属のみを示し、従属関係の種類については何も述べない。従って前置詞構造は属格語尾よりも使用範囲が狭い。しかし、属格語尾が衰退すると、名詞と名詞を繋ぐ前置詞の本来の意味が徐々に薄れ、前置詞が、一般的な従属関係を表す文法形式として安定する（フランス語の de、英語の of、ドイツ語の von 等は元々「～から」を表す前置詞）。ただし、多くの印欧諸語では格変化語尾が完全に消失したということはなく、例えばカムライグ語では代名詞だけは格変化を保っている。また英語のように、格変化語尾(-'s)と、of を用いた前置詞構造の両方を持ち、それぞれ語順が固定化しているという場合も少なくない。

2．カムライグ語の属格構造：概観

カムライグ語では、上述した全ての種類の属格構造、すなわち（1）格変化

©日本カムリ学会 2005
Bwletin Cymdeithas Astudiaethau Cymreig Siapan 1-1:3-8

語尾、（２）語順、そして（３）前置詞構造が用いられている。（１）については代名詞のみに限られる。６世紀半ば頃にカムライグ語に発達する以前のブリティッシュ方言では名詞の格変化は定説になっており、その名残が現在のカムライグ語の地名に残されている(Pen-tyrch：pen「頭」＋tyrch<twrch「猪」の属格形)。名詞の場合は（２）の語順によって従属を表す。しかし以下に見るように、この語順による属格構造は、「決定詞」としての機能も果たしているために、決定詞として機能しない属格構造として（３）の前置詞構造も発達した。これら三つの属格構造を順に見ていく。

２．１ 屈折変化（代名詞）

カムライグ語の人称代名詞は、主語、目的語に用いられる「一般形」((f)i, di, e(f)/hi, ni, ch(w)i, nhw)とは別に、名詞や動詞的名詞に従属する「属格形」(fy, dy, ei, ein,eich, eu)を持つ。[4] これら属格形は主要語の前に置かれる。その際、名詞の語頭子音は代名詞の人称・数に応じて緩音現象を起こす。[5] 強調のために、人称代名詞の一般形が主要語の後に置かれることもある。

fy nhad (i)「私の父」(< tad「父」(鼻音化))
dy gariad (di)「君の恋人」(< cariad「恋人」(軟音化))
ei ben (ef)「彼の頭」(< pen「頭」(軟音化)),
ei phen (hi)「彼女の頭」(< pen (帯気音化))
Yr wyf yn ei gweld (hi)「私は彼女を見る」(< gweld「見る（こと）」)

最後の例文の gweld は動詞的名詞であり、名詞として機能する。文字通りには「私は、彼女を見ることの中にある」を表すと考えてもよい。動詞的名詞は屈折変化すると、名詞性を失って動詞性と帯び、代名詞は従属せず、独立した目的語となる。それに応じて代名詞も属格形ではなく一般形を用いる。

Fe welais hi「私は彼女を見た」(welais < gwelais (fe の後は軟音化) < gweld の直説法過去１人称単数形)

２．２ 語順（名詞）

属格名詞が名詞の場合、主要語の後に置かれる (llyfr Dafydd)。

ここで、語順による属格構造と、「決定詞」という機能の関連について言及しなければならない。カムライグ語では、多くの印欧諸語と同様、名詞の定・不定を区別し、定名詞は、普通名詞の場合、定冠詞(y, yr, 'r)や、２．１で扱った代名詞の属格形がその名詞の前に現れる。Dafydd のような固有名詞の場合は、それ自体で定名詞となる (yr Eidal「イタリア」のように定冠詞を伴う固有名詞もある)。不定名詞の場合には形式的には何も標示しない。定冠詞や代名詞の属格形のように、名詞の定・不定を特定する機能を持つ語や句を総称して、決定詞と呼ぶ。カムライグ語の決定詞は定の場合のみ有標である。

©日本カムリ学会 2005
Bwletin Cymdeithas Astudiaethau Cymreig Siapan 1-1:3-8

決定詞の働きは、モノの「例」を決める働きをするものと考えてよい。1でも述べたように、名詞は使用する場面で様々なモノを指す可能性を帯びている。単独で用いれば、例えば llyfr は、単に llyfr「本」という種を特定して他の種（例えば「鉛筆」「かばん」）と識別しているに過ぎない。それに対し決定詞を伴って用いられた名詞は、その名詞が指し得る可能性のあるモノの例の中からどれかを特定し、話し手聞き手の注意をそこに引く。その例が話し手聞き手にとって既知のものか未知のものであるかが、定・不定のパラメターとなる。[6]

代名詞の属格形を伴う名詞が決定詞となるのは、代名詞そのものが定名詞であり（「私」「君」「彼」は当然話し手聞き手にとって既知のモノを指す）、主要語名詞がどのモノを指すのかを特定する際の道しるべとなるからである。

llyfr「本」、y llyfr「その本」、fy llyfr「私の本」の構造分析

決定詞	名詞
	llyfr
y	llyfr
fy	llyfr

定名詞が別の名詞に対して属格名詞となった場合、名詞句全体は特定のものを指すようになる。代名詞の場合と同じ理由で、その属格名詞が主要語の指すモノを特定する決定詞として機能しているからである。決定詞の名詞句内での構造的位置は主要語の前でなく後ろになると考えることが出来る。

llyfr Dafydd「ダヴィッズの本」の構造分析

名詞	決定詞
llyfr	Dafydd

llyfr y dyn「その男の本」の構造分析

名詞	決定詞	
	決定詞	名詞
llyfr	y	dyn

（名詞句 llyfr y dyn 内の決定詞 y dyn そのものは名詞句の構造を持ち、決定詞の構造的位置は名詞の前になっている）

定名詞の属格名詞の決定詞としての働きは反復性があり、[名詞＋(定)属格名詞]から成る名詞句が更に属格名詞となって他の名詞に従属すると、その名詞句は決定詞として機能する。更にその名詞句全体が属格名詞となっても同じである。

llyfr tad y dyn「その男の父親の本」の構造分析

名詞	決定詞句		
	名詞	決定詞	
		決定詞	名詞
llyfr	tad	y	dyn

©日本カムリ学会 2005
Bwletin Cymdeithas Astudiaethau Cymreig Siapan 1-1:3-8

2．2．1　形容詞的な属格名詞

[主要語＋属格名詞]から成る名詞句は、二つの名詞を持ち、従って二つのモノに言及しているのだが、それに対して、属格名詞が「モノを指す」という名詞的性質を失い、主要語に対し形容詞のような働きをする場合がある。例えば、cadair freichiau「肘掛椅子」(cadair「椅子」、freichiau < breichiau (語頭子音の軟音化) < braich「腕」の複数形)と言った表現の中で、属格名詞 freichiau は、主要語 cadair がどの「例」を指しているのかを特定しているのではなく、どんな「種類」の cadair なのかを特定し、例えば cadair gron「丸イス」、cadair faban「赤ちゃん用のイス」などと区別している。この属格名詞は形容詞的な働きをしているので、主要語が女性単数名詞の場合、属格名詞の語頭子音は軟音化する。更に、この場合の属格名詞は決定詞としては機能しないので、名詞句全体が特定のモノを指す場合には、名詞句全体の先頭に定冠詞を置く。この構造は、形容詞等の修飾語を伴った名詞に定冠詞が付く場合と同じである(例：y gadair goch「その赤いイス」：goch<coch「赤い」)。

cadair freichiau, y gadair freichiau, y gadair goch の構造分析

決定詞	名詞	修飾語(形容詞・形容詞的属格名詞)
	cadair	freichiau
y	gadair	freichiau
y	gadair	goch

決定詞としての属格名詞と、形容詞的な属格名詞は、名詞句全体に構造上の違いを生む。前者の場合は二つの名詞から成る名詞句だが、後者の場合は[名詞＋属格名詞]のまとまりが一つの名詞として考えられる。

[[llyfr]$_{名詞}$ [fy nhad i]$_{名詞}$]$_{名詞句}$

[[cadair freichiau]$_{名詞}$]$_{名詞句}$　　[y[gadair freichiau]$_{名詞}$]$_{名詞句}$

2．3 前置詞構造

定名詞が主要語に後続する形の属格構造では、属格名詞は決定詞として機能し、名詞句全体は特定のモノを指す。従って、名詞句全体を不定にする必要のある場合には、語順による属格構造は使えないことになる。例えば英語で He is my friend と He is a friend of mine の二つの表現を考えてみよう。前者では所有格形 my が friend の指すモノの例を特定し、「彼」が「私」の持つ唯一の友であるかのようなニュアンスを与えるのに対し、後者では、「私」が持っている複数の友の中で「彼」はその一例である、といった意味となる。カムライグ語では、yn を用いる一般的な名詞叙述文では叙述部内の名詞を不定に保ち、属格構造は、語順ではなく前置詞構造を用いる。[7]

Y mae ef yn gyfaill imi「彼は私の友人である」

©日本カムリ学会 2005
Bwletin Cymdeithas Astudiaethau Cymreig Siapan 1-1:3-7

(gyfaill < cyfaill「友」: imi は前置詞 i「～にとって」の一人称単数形)
これに対して英語の He is my friend のように名詞叙述文でモノを特定する場合には、yn を伴わない特殊な叙述文 (Ef yw fy nghyfaill / Fy nghyfaill yw ef. 等)を用いるようであるが、[8] この点については更なる研究が必要である。

この前置詞構造は、全体に対する部分を表す場合には必ず用いられる：Un o'r dynion (「(彼は)その男たちの (中の) 一人」)。ここで前置詞構造が用いられるのは、名詞句全体が不定であるためだけではなく、全体に対する部分という概念に、「(全体) から (取った部分)」という起点の意味があり、前置詞 'o' そのものが起点の関係を表すからでもある。従って、全体に対する、ある特定の部分を表す場合でも、前置詞構造が用いられる：Yr un o'r dynion (「その男たちの中のその一人」)。この前置詞 o は、一方ではこのように部分性という (比較的) 抽象的な関係を表しながら、他方では Dafydd o Abertawe のように起点「～から (来た)」という具体的関係を表している。文法形式として属格構造とそうでないものとは必ずしも明確に区別出来るものではないことを示している。

注 1) 記念講演では「カムライグ語の属格」という題であったが、発表後、吉岡治朗先生より、「属格構造」の方が話しの内容に適しているのではないかというご指摘を受け、そのように変更した。ここに吉岡先生にご指摘を感謝する。

2) Langacker, R.W. (1987). *Foundations of Cognitive Grammar,* vol.1, Stanford: Stanford University Press, p.189ff. の 'thing' についての章を参照。

3) Langacker, R.W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar,* vol.2, Stanford: Stanford University Press, §4.3.2.1 の 'Reference-Point Model' を参照。

4) Thorne (Thorne, D.A. (1993). *A Comprehensive Welsh Grammar,* Oxford: Blackwell, p.154)の分類では、Independent Pronouns, Dependent Pronouns となっている。

5) 人称・数によってどの緩音現象が生じるかについては水谷宏 (1995)『毎日ウェールズ語を話そう』東京：大学書林、第２７課を参照。

6)「例」「種類」といった概念は Langacker, R.W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar,* vol.2, Stanford: Stanford University Press, §2.2.1 の Type/Instance を参照。

7) Morris-Jones, J. (1931). *Welsh Syntax: an unfinished draft.* Cardiff: University of Wales Press, pp.20-21.

8) Cf. Yr Arglwydd yw fy mugail (Salm23:1)(mugail < bugail「羊飼い」が鼻音化)：1988 年版聖書 (Cymdeithas y Beibl 出版)。